

日本遺産構成資産  
所在地マップ

## ①江戸時代の住宅・土蔵、店蔵



弘化大火から行田の蔵造りに特徴がでた。  
江戸時代の弘化3年(1846)と明治5年(1872)に大火に見舞われ、  
耐火性のある土蔵が造られるようになりました。

行田は冬に北西方向に風が吹くことから住宅部分については  
風が吹き付ける側だけを塗り壁としています。  
こうした”半蔵づくり”の建物が行田の蔵づくりの大きな特徴です。

江戸時代末期の建物に『大澤久右衛門の土蔵』の足袋関連の最初の倉庫だと思わます。この時  
われましたが、その中でも弘化3年(1846)の大火の火を止めたのが「大澤久右衛門家の建物」  
蔵造りに変化が現れました。”防火に有効な蔵  
や保管庫として建てられた蔵のほかに店舗や  
ます。また、酒蔵については、精米機のある蔵、米を蒸す大釜のある蔵など多くの蔵が棟を連ねています。江戸  
末期建設の「今津印刷所」「古蛙宴」が代表例です。



があります。この蔵は「青縞問屋」  
代の行田町は幾度かの大火に見舞  
火は記録的なものでした。この大  
蔵造り”です。そしてこれを契機に、  
造り”すなわち防火対策です。倉庫  
住居を兼ねて造られた店蔵もあり

江戸から明治にかけて、土蔵は外壁を漆喰などで仕上げ、壁も厚くし火災や盗難などに備え、かつ外観に装飾  
などを施すものもあり、象徴としても盛んに造られたようです。  
天万稲荷神社より南側へは燃え広がらなかったため、お稲荷様  
れたのだという言い伝えから、各家の敷地奥に屋敷稲荷が祀ら  
現在でも祀られる家が多く存在しています。さらに、”丙午は火  
い伝えから、この日は一切火を使ってはならないというお触れ  
防火デーの風習は長く続きました。当時の足袋づくりは大火事  
革製品から綿に代わってきて、足袋も革足袋から綿足袋に移ってきたとはいえ、まだ商品として生まれていない  
状況であった。行田足袋を忍藩主の奨励(内職)と考えられます。



また、この大火は  
が日除けをしてく  
れる風習があり、  
にたたる”という言  
が出ました。この  
によって今までの